初めて小学校に赴任して

平成 19 年 4 月発表

元小中学校長　　山脇一郎

私のマニュフェスト

以下、N 市が重点としている各項目について、私の考えを述べておきたい。このなかから、私なりに改革の糸口をみつけ、校長として進めていきたい。

1.小中一貫教育について

N では小中一貫教育を推奨している。しかし、中身は細かく指示されていない。要は校区ごとに緊密に連携をとるということである。カリキュラムを考えることも指示には入っているが、指導要領を逸脱することはできないので限られた選択となる。

小中一貫とは、連続性と系統性から成り立つ。系統性については学指導要領が本来系統的に造られているはずであり、それに基づき十分な小中間の打ち合わせや連絡会を持つことで解消できるであろう。問題は連続性である。小と中の段差や文化の違いは非常に大きく、簡単には解消できそうもない。そこで、キーとなるのは小学 5.6 年と中学 1 年である。この三つの学年をひとくくりで考えるところから小中一貫は始まる。小と中の段差解消がよく言われているが、段差の中身を考え、解消策を述べてみたい。

① 小学校は、守られる社会であり問題行動も規模の小さいもので終わるので厳しい指導が少ない。また担任がひとりで抱え込んだり観察したりするため、芽が小さいうちは顕在化しない。中学校は各クラスを 9 人の目でみるため、一人の教師でも気になることがあるとすぐに学年的な問題になる。また放置すれば 2.3 年のような大きな問題行動につながるとの危機感があるため、時には親を呼んでの厳しい指導となる。

　同じ事をしても、小学校では諭され守られてきたのに、中学校では厳しく叱責される。時には糾弾される。この落差に子どもは驚き、段差を感じることとなる。

　いわば、小学校が母親的指導であることに比べれば、中学校は父親的指導であるということができる。現に、各中学校の生徒指導担当者は、こわい男の先生であることが多い。

　この段差を解消するには、小中とも歩み寄ることが望ましいが、中学の問題行動の重篤さを考えれば、中学の生徒指導を変えることは危険を伴う。となれば、小学校の 5.6 年の生徒指導にけじめのある厳しさを出していくことが大切である。

単に、段差解消のためではなく、実は中学生の問題行動を調べると、小学生の高学年での生活の崩れに行き当たることが多い。タバコや万引きは高学年から始めている生徒が多い。

となると、高学年の児童に対してけじめのある指導、複数の教師が指導し親を呼ぶなどする指導、をしていくことが必要である。このことが段差のひとつを解消することになるし、中学の問題行動を減らすこともできると思われる。

方策・・・・5.6 年の教員が、中学の生徒指導主事の話を聞く。内容は、中学校での生徒指導・問題行動の指導の組織的な進め方とする。
単に問題行動の交流だけにとどまらず、小学校の教員も中学の生徒指導のノウハウを教わることが大切である。

② 中学は教科担任制である。いい面としては、教科の教師が専門的に深い内容を教授できるということである。また、原則として一人の教師はひとつの科目の教材研究をすればよいということになる。
小学校では、専科はあるものの担任がすべての教科を教えることになる。
教科担任制では、子どもの様子を 9 人で観察することができ、よりきめの細かい観察・指導が行える。生徒は、教師がかわってとまどうかも知れない。でも、一人の教師と相性が悪くてもなんとか、一年間いけるが、小学校で担任と相性が悪くなれば、一年間を棒に振りかねない。

この段差は大きい。そこで、小学校 5.6 年では一部教科担任制をやってみてもいいのではないか。ひとつは中学のシステムになれるということ。ふたつは、ある教師がある教科を 3 クラスとおして教えるとなると、今まで以上に教材研究を深められること、三つ目は複数の目で各クラスを見ることで問題行動やいじめ、また生活の乱れ・心の乱れなどをより察知しやすくなるということである。

5.6 年で、一教科でもいいから、教科担任制を実施していくことが必要である。文科省も府教委も小学高学年の教科担任制を奨励している。小中一貫の最も大きな柱は 5.6 年生での教科担任制の実施である。

③学ぶ習慣・・・定期テストの実施

中学では小学校とはテストのシステムが異なる。中学では単元ごとに行うテストもあるが、なにより定期テストが中心である。生徒も定期テストのために塾へ通うといっても過言ではないのである。
ところが、中一を見ていると、定期テストの重要性やテスト勉強の仕方がわからず、テスト前でも、遊んでしまう子が多い。一年生での出遅れはその後にひびき、特に英語では入試前に苦労する生徒が非常に多い。

ならば5.6年の時に、ある分量をテスト範囲とする定期テストを実施して、その重要性やテスト勉強の仕方を教えていけばどうか。もちろん、中学のように通年で行うわけにはいかないが、5年で年一回、6年で年二回程度実施することが今本当に必要なことである。
また、小学校の時には80、90点とれた子が中学へきたとたん、50、60点になることがあり、こどもはカルチャーショックを受ける。親は、これを中学校の教え方のまずさととり、不信を買うことがある。
こういった面からも、定期テストを実施し、テストの厳しさを味わわせることは、自分を知り意欲を醸成する面からも大切だし、勉強の仕方を学ばせる観点からも大切であると思われる。

④学ぶ意欲の醸成・・・学力低下の原因

学力の問題が指摘されているが、「ゆとり」から「厳しさ」という方向だけで議論が進められがちである。学力低下の問題とは、実は学習意欲が減退していること自身が問題なのである。学習意欲の低下は、中学校においては、高校全入、大学全入の時代を迎えて学ぶ必要性が薄れたことがあげられよう。

また、社会の閉塞的な状況が、学ぶことがそのままいい生活につながらないというあきらめ感を持たせることにもなっている。

しかしである、現在もこれからも資源のないわが国では「ものづくり日本」を再生することでしか日本は国際社会で生き延びる方法はないのであって、学ぶ必要性というのは実は高度成長期の時代より今の方がはるかにあるのではないかとさえ考えるのである。

要は小学生・中学生にそういう国際社会における日本の立場をしっかりと知らせていくことが大切であるし、ものづくりのすばらしさやものづくりの魅力を子どもたちに味わわせていくことが極めて重要であると考える。中学にあっては職場体験、小学5.6年生にあってはものづくりの職場見学を実施するなどして、ものづくり日本の再生を図ることが大切であると思われる。

学ぶ必要は今の方が大きいし、そのことを伝えていくことが喫緊の課題である。

また学ぶことは自分のためばかりでなく、社会のため、日本のため、世界のためという観点で指導をしていくように、方向を変える必要がある。

そういった面から小学校では、特に低学年では学ぶ意欲・学ぶ楽しさを味わわせることが最も大切であるということになる。

このために、授業研究は大切であり、やったらできた、できたらほめられた、という経験を低学年のうちから数多くつませることが教師の仕事で

あるとも言える。

⑤学年呼称の変更

これは、法的にはどういう扱いになるかわからないが、以前テレビで見たときには小中一貫の中で実施されていた。

中学生は、7 年、8 年、9 年と呼んではどうか。呼称を変えることで小中一貫がより鮮明になるし、小も中も保護者も小と中の連続性と系統性をより意識するようになるだろう。また教員も、連続性を意識せざるを得なくなり、小中一貫教育がより進むものと考えられる。ぜひ、実行してほしい。

2.国際コミュニケーション科

小学校全学年で英語をし始めて 2 年目である。

◎コミュニケーションする態度の育成

小学 1 から 4 年までは、第一期として「英語に親しむ」を目標とする。

小学 5.6 年と中 1 は第二期として「英語を身につける」を目標とする、

中 2.3 年は第三期として「英語を活用する」がそれぞれの時期の目標ではないかと考えている。

第一期・・・・

この時期は、徹底的に耳から入れることが必要である。文字は使わないで、聞くことと話すことを中心に組み立てる。英語を使った活動を通じて言語や文化に対する理解を深めさせたい。この出会いが楽しいものであれば、英語教育の半分は成功したようなものである。

第二期・・・

聞く・話すを中心にしながらも簡単な英文の読み書きをさせたい。建物の中で英語で書かれた指示が読めたりすると、うれしくなった経験が私にはある。歌の歌詞の一部とかを利用し、会話を楽しむところから簡単な読み書きまで進める。また、この時期は、ALT や外国人との交流を通して、積極的にコミュニケーションをとろうとする態度の育成を図りたい。

第三期・・・

ここで、今までやってきた英語教育と入試英語をドッキングせねばならない。会話から文法・読み書きに中心をシフトさせていくことが必要となる。4 つの言語活動を調和のとれた形で充実させていくことが適当である。

しかし、ここまでの英語教育がうまくいっているのであれば、この時期はそれほど心配することもないと思われる。

ただ、スキルの向上は当然目指さなければならない部分ではあるが、このスキルを活用する場面は限られているため、中学校に入学するまで興味・関心を持続することは困難であるとの指摘もある。

中学校英語へのスムースなドッキングということが、小学校での英語教育の大きな目標であると考えている。

3.組織について

小学校は始めてであるが、組織の細かさ・緻密さに驚いた。〇〇部として、いくつかの仕事というわけ方ではなく、全員の役割が細かく書かれる。
組織の活性化とは言うのは簡単だが、実際のところ、どのように活性化させるかは、いまだ小学校のシステムを熟知していない私としては、極めて難問である。

今の時点で考えられることを書こう。

① 報告がすみやかに入るシステム作り

各学年では、中学ほど毎日問題行動があるわけではない。しかし、ちょっとした訴えやささいな事件、また親との確執はあると思われる。現時点では、各学年の様子が校長にはわかりづらい。各教室をまわればいいのだろうが、子どもの気が散ることもあり、いつも周れるわけではない。各学年には学年主任がいるので、一週間ごとに紙に書かせて提出させることを考えている。

本校には各学年一名よりなる子ども支援会議なるものがあるらしい。そこで各学年から報告が聞けるならそれでもいいと思う。とにかく、教員、教務主任、教頭ですべての教育活動は回っており、小学校をよく知らない私としては、事実上どこでいつ何が決定されるかがよくわからない。たとえ、わかったとしてもどこが、問題点であり、どうすれば改善となるのかが、よくわからないのである。

あれよあれよという間に進んでいっている、といった感触である。

② 市教委の真意は

市は、どこの部分を校長に触ってほしいかが、私には未だに図りかねている。たとえば、職員朝礼の司会は、どういう順番かわからないが、輪番になっている。すべて、教務主任で司会をと押していいものかどうか、おそらく組合との協議や他校とのからみもあるので、私だけが突っ走っても市教委から支援がいただけるか不安である 。特にNは横並び意識を強く感じるので、私だけが突っ走っていいものかどうか、特に慎重にならざるを得ない。

また、朝礼で司会が「組合から」と必ず聞く。あれは勤務時間中の組合活動にあたると思われる。枚方では、一言でも言おうものなら書記局と委員会に通告しようと準備をしていたし、実際にしたこともある。枚方市教委も勤務時間中の組合活動を厳しく制限するように、校長に指示を出していた。だからやれた。
ここはどうなのだろうか。おそらく寝教委も目をつぶっているところなのだろうと思われる。ここでも、わずか 2 年のピンチヒッターの私が激しく闘争をしたら、市内は混乱するだろう。まして、紛争の種を後任の校長に継いでしまっては大変である。
国歌斉唱でも、ピアノでやれとも舞台正面掲揚とも指示はない。遺漏のないようとしか指示はない。枚方方式でやれば、委員会もとまどうと思われる。
どこをどう踏み込むか、踏み込むことに勝算があるかどうかを、しっかりと把握する一年にしたい。
組織については、いいか悪いかわからない。ただ、子どもの様子が入るようなシステム構築が今年私に与えられた使命であると考えている。

③ 年間任命チーフ制

しかし、遠い課題ではあるが、各組織に年間通しの任命チーフ制をしくことが私の夢である。一番の矛盾は、保健体育部に保健主事がいるし、内部で決めた部長がいる。そして、実際には互選した部長が一応統括しているのである。これをなんとか一本化できないか。
年間任命チーフ制は、前任校では大成功であり、私の分析と構想が最も一致した施策であった。いわば私のライフワークとでもいうべきものである。そのためには、組織のありようと動きを今年はしっかりと見て分析し、問題点を洗い出し、任命チーフ制をしく下地作りが私の仕事であろうと思う。

小学校はみんなでという思想が強い。自分だけが突出しないようにみんなと歩調を合わせてという感じが中学校よりは強いように思う。突っ走るものがいてもいいと思うが、なかなかそうはならないようである。
職員会議は、すべての事項について個人的な突出を防ぎ、みんなで進めているのだという実感をお互いが共有するための重要な装置となっている。
現に、校長の指示さえも提案と言い換えて、この装置で処理してしまう。
今後の課題としては、職員会議を形骸化することが必要である。戦略としては、それを形骸化するための装置を作る必要がある。
そのひとつが年間任命チーフ制である。校長とチーフのルートを確立すると、職員会議とは別の指示系統が確立されることになるのである。

このことで、真に校長を中心とした体制を作りたい。

④運営委員会

本校は、主任の中で教務主任だけが突出していて他の主任については悪気はないかもしれないが、事実上全く機能していない。したがって、主任から構成される運営委員会がない。このことは、職員会議を形骸化する装置がひとつ存在しないことを意味する。

今後は、本校の組織の機能の仕方を詳細に検討しながら、他校のようすも把握して、運営委員会の実現に向けて努力していきたい。

4.心豊かで思いやりのある子供

心豊かというのは、極めて抽象的な言葉である。豊かというのは何かゆったりと落ち着いているといったイメージがある。

具体的に考察してみる。心豊かというのは、心という引き出しにどれだけ多くの価値観を理解しているか、どれだけ多くの価値観を受け入れられるか、ということであろう。

このためには、さまざまな機会にさまざまな価値観と出会わせることが大切である

①道徳教育

道徳教育と道徳的な教育とは異なる。道徳的な教育とは、いい価値観を説諭等の方法を使って知らせることである。これは説教とか徳目の押し付けになりそれなりに即効性はあるが、さまざまな価値観との出会いとは程遠い。

今の子どもに必要なのは、さまざまな価値観に気づかせることである。

そのためには、道徳の時間には読み物教材を使用して担任が子どもの心を揺さぶることが大切である。自分の考えが「私」であるとすると、長い間わが国が培ってきた価値観「公」を自分の中に取り入れ、多くの場合「公」が優先することを気づかせたい。これは社会規範の醸成につながる。

また、道徳の教材を使用して、子どもに話し合いをさせることでいろいろな価値観に出会うことができるだろう。いじめについては一般にはだめだといわれているが、いじめられるほうにも責任があると発言する子もあるかもしれない。これはこれで話し合わせたらいい。お互いに話し合っているうちに、一般に言われている徳目が妥当であることに気がはずである。

また、読み物教材そのものからも、作者の価値観を感じることができよう。

道徳の時間は自由に発言ができる楽しい時間であることを子どもたちに知らせなければならない。

本校では、道徳の時間が単なる説諭になってみたり学級活動的になってしまったりしているようである。教材を買わせて毎時間指導案を作成し、それに基づいて実施するところまではいっていない。
今後は、指導要領どおりの道徳の時間を実施できるよう、問題点の把握と実施のための下地作りに努めたい。

② 人間関係力の育成

人間関係力は、相手によりそれぞれの付き合い方の距離を定める力とそれを理解する力の二つから構成される。
人間関係力の育成について触れてみると、小学生低学年にあっては、「友達と仲良く」、5.6 年と中一にあっては「人も気持ちがわかる」、中学 2.3 年にあっては「社会の中の自分」、というテーマで指導することが必要であろう。
低学年について、仲良くしなさいというのは、妥当であろうと思う。なぜなら、仲良くという言葉の裏には、いろいろな人とうまくやる、ということも含まれているからである。
しかし、高学年になって、仲良くせよ、というのは、少し意味合いが変わってくる。多くの場合、中学校でもそうであるが、仲がいいことや相手が好きであることの証を常に立てさせられることが含まれてしまうので、そうはできない子どもは、敵意があるまた集団を乱すものとして扱われ、集団になじめなかったり、集団から弾き飛ばされたりする。結果、いじめや不登校にもつながりかねない。
人間関係力という点から言えば、高学年になれば、「つかずはなれず」という大人の付き合い方を教えるべきである。そしてそういう付き合い方をする子どもを認めるような指導が周りの子に必要である。高学年の「人の気持ちがわかる」という目標はこういうことをいうのである。
そろそろ、現実を教えていい。人生で 3 分の 1 は嫌いな人であるが、みんなつかずはなれずにうまく人間関係を保っている。
言い換えれば、人間関係力とは人と人との距離の問題であるとも言える。1 メートルの関係もあれば、100 メートルの関係もある。ただ、教室はせまいので、みんな 1 メートルの距離の人間関係だと錯覚しがちであるが、形而上の思考がそろそろできている 5.6 年以上は、教室内であっても、100 メートルの距離の関係を作る子どもも出てくる。ここを教師も子どももよく理解することが大切である。この距離感を理解させるのは日常の指導と道徳の時間である。
この人間関係力は英語や IT のコミュニケーションの基本ともなる。
また小中一貫教育の柱ともなる。
人権教育の真髄とは、この距離感をお互いがどれだけ理解するかということではないのか。

③いじめ撲滅について・・生徒指導全般

中学の経験からいうと、中一での不登校やいじめられた生徒を調べていくと、5.6 年でいじめにあったということがよくあった。いじめの起こりやすい時期の前期が 5.6 年と考えられる。後期は中一、中二である。

いじめは上の人間関係力とは無縁の概念である。あってはならないし、相手に物理的。精神的に危害を加えるというのは、距離をとりながらも平穏につきあおうということとは全く無縁の話である。

いじめについては、児童集会で、してはならないこと、しては恥ずかしいことという位置づけで、繰り返し話をしていきたい。何より、いじめやいじわるは本当になくすんだという姿勢を子どもにも教師にも見せて生きたい。道徳では話し合わせることも必要だが、まず防がねばならないという緊急措置的な意味もある。また、児童はかわいいが、してはいけないことをしたときには、鬼のような厳しい態度で指導にあたりたい。そして、そういう姿勢・態度を職員に見せていきたい。

今日も登校中に傘を振り回している子がいたから注意したし、傘をかついでいる子にも注意をした。生活上のささいなことであればあるほど、ほとんど注意されないまま、大きくなってしまう。私は中学校の生徒指導で身に着けた小さなマナー違反でもきっちり注意する姿勢を示し、よくないことはよくないとはっきり言うようにしていきたいと考えている。また、その姿勢をぜひ多くの教員に見せて、小さなことから指導していく大切さを知らしめていくことが私の使命であると考えている。

生活の乱れは心の乱れ、は小学校でも大切な観点であることを態度で教員に知らせていきたい。

5.家庭・地域との連携

市教委の文を読むと、地域という言葉は非常に多く出てくるが、家庭という言葉は非常に少ないのが気になる。

私は、あらゆる教育の中心は家庭であると考えている。地域が学校に協力しているのではなく、地域と学校が家庭に協力していると考えている。

子どもの心と体をはぐくむ家庭は、ある意味で学校教育を超えるべきだとも考えている。

その三者がそれぞれの特質を生かしその役割を果たすことが大切であり、その上で連携をしていくことが必要である。

① 家庭

家庭は、子どもの心と体を育むところである。また世の中のさまざまな不

条理や不合理を、深い愛で緩和し明日への力に変えていく変換装置であるとも言える。
教育力のない家庭は、緩和してあげられる愛に乏しいため、子どもの愚痴を真に受けて、現実を子どもの気にいるように変えようと学校等にクレームをつけてくることが多い。これでは子どもの中に、不条理な現実を受け入れてかつ乗り越えようとする力は育たない。
家庭は、子どもに対してオールマイティな影響力を持つところでもある。したがって、親の態度は子どもの将来に大きな影響を及ぼす。
マドンナたちのララバイという曲がある。あれはまさに家庭教育のあり方の典型とも考えられる。
「たとえ、あなたが背中を向けても　いつもわたしはあなたを遠くでみつめている聖母」　まさに家庭教育の真骨頂ではないか。
教育力のない家庭は、子どもが背中を向けたとたんに虐待や逆襲にでる。中学生だと、このことが家出や淋しさを埋めるための不純異性交遊につながっていくことが多い。
今後はあらゆる機会をとらえて、すべての基本は家庭教育であること、あらゆるしつけは家庭の責任で行われなければならないことなどを情報発信していきたいし、時には家庭の役割を説き、また家庭の自覚を促すための方策を講じていきたいと考えている。

② 地域

地域は、子どもにさまざまな価値観を現出する装置であると言える。
地域は、子どもが始めて出会う現実であり、うるさい大人、やさしい大人、危ないところ、遊んではいけないところ等々、さまざまな価値観や社会の厳しさを味わう第一歩となる。地域は単に子どもの実態に合わせるだけではなく、社会の厳しさもぜひ現出してほしいと思う。
危険なところがあるなら、その場で近くにいる人が注意を与えることが必要であり、そのことは学校のように抽象思考をせまるものではなく、極めて具体的であり、生きた学習となりうる。こういったことで、子どもの中に危険を察知したり予知する能力が育つと考えられる。
また、こういうふうに声をかける関係を構築しておくことが、中高校生が地域でタバコを吸ったりしていたときにも、注意できることにつながる。地域で子どもを育てる、とは子どもに対して耳の痛いことであっても、注意を与えていくことであろう。地域のルールを知らせ、守らせていくということである。
また地域でしかできない指導もある。タバコを吸っている子どもには、地域ならば緩やかかつ段階的に指導が可能であり、学校が一律全面禁止し

か方策がないのにくらべれば、指導の幅は大きいと思われる。ぜひこういった良さを生かした指導をしていただきたい。

また、地域はゆりかごともなり、大きくなったときに物理的・精神的に戻れるところ、精神をフラットにできるところとしての意義も大きいと思われる。

地域とかかわるときには、上のような地域の役割を意識し、情報発信していきたい。地域が学校化しないこと。これは大切であると思う。地域がゆりかごであるためには、地域の活動は地域の価値観で進めるべきであって、学校が入ることは控えたほうがよいと思われる。

「三者連携すれども則を越えず」

③ 学校

学校は知識を教えることだけが本来の仕事である。それに伴い集団を維持するための最低限のルールの指導を行う場でもある。最近、学校の役割が肥大化しているが、平成８年の中教審答申にあったように、家庭や地域に任せたほうが効果が発揮されるものも多いと思われる。私は、学校がミニマム化することが家庭教育の重要性についての啓発となると考えている。

④最後に

学校は、家庭・地域と連携していくが、単に同じことを一緒に行うのではなく、それぞれの特質を生かした役割を果たした上で連携していけるよう、校長としてかかわっていきたいと考えている。それこそが、学校週五日制実施の本来の趣旨であったはずである。

私は、この趣旨の徹底と学校のスリム化という概念こそが新しい時代を開くための重要なキーワードであることを信じて疑わない。現に平成８年の中教審答申では、このふたつのキーワードが、学校週五日制のもとでの新時代の学校づくりの原点となっていたのである。その後、ゆとりに対する批判等でよれてきたけれど、現場の校長の多くは、この二つの概念が真実であると感じている人は多いのである。

現在、学校は地域のセンターであると位置づけられてはいるが、学校に期待されていることや学校がせねばならないことはあまりにも多い。管理職も含めて学校の教員が授業だけに集中できる環境づくりを進めていくことが、学力の向上のためには極めて大切であり、この点からも学校の役割を見直しスリム化していくことが喫緊の課題であると考えている。